

# 西郷「征韓論」福沢「脱亜論」に学ぶ①

## 福沢諭吉いわく

# 「妖魔、悪鬼の地獄国」

宮脇淳子

東洋史家

何度謝罪しようと援助しようと、底ナシの欲望を突き付けてくる連中……  
ナニ、そんなこと、とつくに福沢諭吉先生がお見通し——

至ったのです。

いまから百三十年ほど前、福沢諭吉は「脱亜論」で、清・朝鮮のような国が隣にあるのは日本の不幸であり、私は両国を心において謝絶する、と宣言しました。朝鮮近代化のため物心両面で支援していた開化派の金玉均たちが、「甲申政変」（一八八四）後に首と手足をバラバラに晒されるといふ残忍な方法で処刑されたことに、福沢は心から怒り、朝鮮という蛮族に失望したのです。

福沢は、「脱亜論」に先立つ「朝鮮独立党の処刑」という論文で、激しい表現で朝鮮政府を批判しています。

「人間娑婆世界の地獄は朝鮮の京城に出現したり。我

## 李朝の亡霊

李明博韓国大統領の「天皇の謝罪要求」発言は、竹島上陸の暴挙もかすむほど、日本国民の感情を逆なでしました。やはり朝鮮民族はそういう人たちだったのかと、ほとんどの日本人があらためて気づかされた事件です。

いくら経済援助をしようと、その必要もないのに日本政府が謝罪しようと、それに礼をもって応じるどころか、ますます厚顔無恥な要求を突きつけ、果ては根源的な意味で日本の象徴である天皇陛下を侮辱するに



輩は此国を目して野蛮と評せんより寧ろ妖魔悪鬼の地獄国と云わんと欲する者なり。而して此地獄国の当局者は誰ぞと尋るに、事大党政府の官吏にして、其後見の実力を有する者は即ち支那人なり。我輩は千里遠隔の隣国に居り、固より其国事に縁なき者なれども、此事情を聞いてただ悲哀に堪えず、今この文を草するにも涙落ちて原稿紙を潤すを覚えざるなり」

同じ極東の人間として欧米列強の脅威にともに立ち向かおうと、いくら意を尽くして道理を説いても耳を貸さない支那と朝鮮に対して、日本人はほとほとあいそが尽きました。この後、朝鮮の独立をめぐる日清戦争が起こります。歴史は繰り返す。いまの状況は日清戦争前夜にそっくりです。

もともと李明博は大統領就任当時、「歴史認識問題で日本に謝罪を要求する気はない」と発言していました。それが手のひらを返したような言動に走ったのは、李明博個人の保身にすぎないかとみて間違いないでしょう。

経済回復を訴えて当選しながら何の成果もあげられず、ただでさえ批判が強まっていたところに、今年七月、実兄の李相得前議員が収賄容疑で逮捕・起訴されました。「大統領にも金が渡ったのではないか」という疑念も消

えず、大統領退任後に逮捕されるのではないかと噂も絶えません。そこで、日本に対していまさらのように慰安婦問題を持ち出して難癖をつけ、竹島に上陸してみせ、天皇に謝罪を要求して国民の喝采を得ようとしたのでしよう。愛国の英雄になり、大統領としての影響力を残せば、自分に好意的な次期大統領候補を当選させて逮捕を免れられるかもしれない——というのが大方の見解ですが、おそらくそれは当たっていると、思います。

というのは、戦後、日本統治を脱してからの韓国と北朝鮮では、せっかく日本が退治した李氏朝鮮の亡霊がよみがえったとしか思えないからです。

## 血を血で洗う五百年

紅巾党の一派だった朱元璋が元(モンゴル)を中国から追い出して一三六八年に明朝を建てると、モンゴルに縁の深かった高麗朝では、李成桂がクーデターを起こし、一三九三年、明の太祖洪武帝(朱元璋)から「朝鮮」の国号を授けられて明の属国となりました。これが李氏朝鮮(李朝)のはじまりです。

それからのおよそ五百年、正確に言えば一三九二年から一九一〇年までの五百十八年間はまさに暗黒の時代です。「李朝は非常に文明レベルが高いというイメージを持つていた」と言った日本の大学教授がいますが、とんでもない。学者ともあろう人が、韓流歴史ドラマの見すぎではないでしょうか。

実際の李朝は、福沢諭吉の言う「地獄国」そのものでした。ひたすら大国である明と、明が滅びれば内心では蛮族とさげすみながらも新たな宗主王国である清におもねり、宮廷と貴族階級である両班は奢侈にふけて党派闘争にうつつをぬかし、民衆は圧政による極貧と飢えにあえいでいました。現在の北朝鮮に酷似しています。

韓国の学者、崔基鎬教授は「李朝のもとで、農民を中心とする国民は、人類史上で最悪の搾取を蒙った」と書いています（韓国 墮落の2000年史『祥伝社黄金文庫』）。民衆はつねに官によって苦しめられていたため、韓国にはいまでも「官災」という言葉があり、官災除けの御守りすら売られているそうです。

もちろん、こんな状況では商業が生まれるどころではありません。筑波大学の古田博司先生は、李朝にはまったく商店がなく、市場があるだけだったとおっしゃって

います。さらに、車輪がない。木を曲げる技術がないから樽もなく、人々は水などの液体は甕や升に入れて、かついで運んだのだそうです。

王族や両班たちは民衆のことなど、そもそも人間と考えてはいませんでしたから、いかに自分たちが力を得て、いい目を見るかということしか頭になかったのです。そのため、文字どおり血を血で洗う党派争いが五百年間、間断なく続けられました。李氏朝鮮の歴史は、党派争いの歴史です。この国の王族に生まれてまともに生き残るのは至難の業でした。

太祖（李成桂）が李朝を開いてすぐに、八人の王子たちの王位争奪が起こり、建国の功労者たちだけでなく、兄弟のうち二人が殺されました。そもそも高麗朝を裏切って王と王の一族を皆殺しにした太祖自身が、息子たちの醜い争いにいやげがさして隠居してしまっただけでした。

## 閔妃暗殺——日本の役どころ

こうした五百年におよぶ血なまぐさい一族の争いを概観すると、日本の関与がとりざたされる李朝末期の

閔妃暗殺についても、大院君と閔妃と高宗の一族の争いに、日本が脇役としてかかわっただけという構図がはっきり見えてきます。

王位をめぐる肉親同士の殺し合いだけではありません。王の側近である両班たちも党派争いに明け暮れ、ライバルを蹴落とすことしか考えていませんでした。

王妃が亡くなったあととの服喪期間を一年にするか三年にするかで意見が対立したことがあります。王が「一年」と決めたら「三年」を主張した一派は肅清されました。ところが次の王が「三年」と言い出したので、失脚した党派が王の側近に返り咲き、かつて自分たちの仲間をひどい目にあわせた一党に情け容赦ない復讐を加えたのです。

両班たちの議論は、よりよい解決策を探るためではなく、相手を陥れることだけが目的でしたから、必ず政争に発展しました。対立した党派の主張に対しては、それが正しいか間違っているかなど関係ない。何であれ反対のことを言わなければなりません。

一五九〇年、豊臣秀吉が明への侵攻を企てているという情報に不安を抱いた時の宣祖王が、様子をさぐるため日本に使節を派遣したときも、帰国した正使が「秀吉

恐るべし」と報告したのに対し、副使が「秀吉は凡庸である。侵攻の恐れはない」と正反対の主張をしたのは、何のことはない、両者が違う党派に属していたからです。結局、副使の意見が取り入れられたのは、そちらの党派の力が強かったというだけの理由でした。

おかげで、秀吉の日本軍が半島に上陸すると、何の準備もしていなかった王や貴族たちはなすすべもなく逃げ出しました。落ちのびていく宣祖王に、民衆はこぞとばかり罵声を浴びせ、石を投げたといえます。

秀吉の朝鮮出兵によって国土はますます疲弊しました。日本軍よりも、応戦に現れた明軍のほうがたちが悪く、朝鮮を蹂躪しつくしたといえます。それでも宮廷は自分たちの責任はそっちのけで反省もせず、宗主国の明の悪口は言えないので、日本を罵つてうさをはらすだけでした。この戦乱から教訓を得ようという考えもさらさらずなく、とりあえず平和が戻ると、またも党派争いにふける情けなさでした。

## 殺害、処刑、追放、追従、讒言

『龍の涙』という、李氏朝鮮を舞台にした韓流歴史ドラマ



マがあります。北京の紫禁城しんじんじょうより李朝の宮廷のほうがずっと立派だったり、衣装があまりにきらびやかだったり、例によってあからさまに美化して描いています。その内容はとにかく陰謀と妬みねたと嫉みそね、同族の殺し合いの連続です。あまりに人間と党派の関係が複雑なので、韓流時代劇ファンのためのムックには親切にも時代ごとの関係図が載っているくらいですが、そこには殺害、処刑、追放、追従、讒言ざんげんなどの文字があふれています。この点は韓流歴史ドラマには珍しく史実ですが、そんな話が延々百五十話もつづく。韓国人は、それほど権力闘



韓流歴史ドラマ「龍の涙」 ドロドロした人間関係と陰湿さ、残忍さだけは史実どおり

争や、人間同士が敵対して争うのを見るのが好きなので。韓国人にとって人間関係は敵か味方かしかない。李朝時代の党派抗争の悪しき伝統と言っていていいでしょう。

ちなみに、ヒロインをいじめる悪役の女性に人気があるのだそうです。ただおろおろしているだけのヒロインより、悪役のほうが表情豊かだし、生命力にあふれているから、はるかに魅力的なのはわかります。もつとも、その魅力的な悪女が最後の最後に失敗するのを見て「スカッとする」というのが、いかにも韓国人です(笑)。

ところが、このドラマにはまる日本の女性たちもいます。彼女らによると、何でも遠慮なく口にし、人を平気で罵る韓国人がうらやましくなるのだそうです。あのドラマのように、嫌いな人に思いきり悪口を言えたらどんな気持ちがいいだろう、そう思う自分が可愛い、というネットの書き込みもありました(笑)。

こうした李氏朝鮮のような世の中では、民衆も自らを守るために平気で他人を裏切り、嘘をつき、ものを盗み、身勝手になるしかありません。そうしなければ生きのびられないからです。だから、韓国人には公共心というものが育たなかった。そもそも、為政者たちが私利私欲だけで動き、「公」という概念を持たなかったのだから、

やむをえないとも言えます。

## 誰が大統領になっても超法規

韓国の大統領は非常に大きな力を持っています。李朝は法治社会ではなく、王がかわるたび、新しい王の思うままに国を治める人治社会でした。今日でも、大統領は国王のような権力を持ち、政権が交代するたびに前政権を否定して政策をかえています。

たとえば、前出の崔基鎬教授は、大統領の絶大な権限について、金大中大統領の例をあげています。彼は北朝鮮の金正日総書記との南北首脳会談(二〇〇六年)を成功させると、韓国独立以来の国是(こくぜ)であった「反共」を個人の一存で放棄してしまいました。

民主的な議論をたたかわせることも、国会に諮はかることもなく国是をかえ、反共法である国家安全法が改定されたのです。これまで北朝鮮を悪として描いてきた教科書に、金大中が金正日と抱擁をかわす写真が掲載されました。

もちろん、建前上、韓国は民主主義国家ということになっていますが、実際は人知主義的な面があるのです。

崔教授は、前掲書のなかで、こう書いています。

「今日でも、大統領は名を残したい意欲だけが旺盛であつて、前任者の政策を踏襲したり、前任者の業績を重んじようとしめない。(略)歴代大統領のほとんどの者が、就任したら唯一天上人思想(ユルチヨサンイササ)を持って国法を無視するか、法にはずれたことをする。いまだに人治社会を構成しているのである。これは歴代の王たちを髣髴させるものだ。まさに李朝五〇〇年の残滓(ざんし)というべきである」(前掲書)

冒頭で、李明博の愚挙は自らの逮捕を恐れたためだと言いました。日本では首相の逮捕というと大事件ですが、韓国大統領が哀れな末路をたどるのは、もはや茶飯事(はんじ)です。

初代大統領の李承晩(りしょうばん)は没落両班の出身で、竹島占有的張本人ですが、その専横政治に民衆が蜂起し、失脚・亡命しました。彼の場合はそれこそ自業自得ですが、「漢江(ハンガン)の奇跡」と呼ばれる経済復興を成し遂げた第三代大統領の朴正熙(ぼくせいせい)は側近のKCIA部長に暗殺されています。

第五代(げんごだい)の全斗煥(ぜんとうかん)は、「光州事件」などの民衆弾圧(てんあつ)の罪で死刑判決を受け(のち減刑・特赦)、次の盧泰愚(ろたいぐ)は

同じく光州事件や政治資金隠匿(いんかく)の罪に問われて懲役刑(のち特赦)、前大統領の盧武鉉(ろぶけん)は在任中の収賄疑惑を追及され、自殺しています。

## 北も南も近代国家を装った李朝

歴代大統領の罪状が本当かどうかは措(お)くとして、まるで国王のような権力を持つていけば、そこに賄賂(わびろ)や不正な金が動くのはむしろ当然とも言えます。中国も同じですが、韓国でも権力者は一族でその甘い汁を吸おうとする。権力を握っているあいだに一族で蓄財して、できる限りいい目をみようとするのが中国人と韓国人です。彼らには「いま」しかありません。あとは野となれ山となれ。それが人生だと思つていなのです。どれだけ波瀾(はらん)万丈(ばんじやう)の人生を送ろうとも、最後は「畳の上で安らかに死にたい」という日本人の考えかたは、韓国人には理解できません。

そうして、大統領が辞任したとたん、それまで媚(こ)びへつらつていた連中がよつてたかつて引きずりおろし、おとしめようとします。民衆はそれに拍手喝采(はつしやくさい)するのです。その人物がかつて握つていた権力が大きければ大きいほ

ど、溜飲を下げる。事大主義で権力に弱いからこそ、権力者が落ちるのを見るのが好きなのです。

だから、かつての宗主国である日本をおとしめ、あやまらせるのは韓国人にはこのうえない快感です。まさに、李朝以来の、韓国人の病<sup>ケマヒ</sup>といってもいい。

日本が満洲に進出したとき、朝鮮人は争うように創<sup>そう</sup>氏改名を願<sup>しかめい</sup>い出て、日本人のような顔をして満洲でいばっていました。ベトナム戦争に参加したときも、まるで自分がアメリカ人であるかのようにベトナム人を見下して、あちこちで虐殺を繰り返します。虎の威を借りておきながら自分が狐であることを忘れ、虎であるかのようにふるまうのです。事大主義もきまわれり、とういしかありません。

李明博が竹島上陸にあたって「日本はもはや大国ではない」と言ったのも、あからさまな事大主義です。古田博司先生の言葉を借りれば、自分たちが小文字の「x」で、宗主国が大文字の「X」だとすると、その「X」が没落したら自分たちがもう「X」だと考える。ソ連が崩壊したときに北朝鮮が「いまやわれわれが世界共産主義の中心である」と言いはじめたのも、そういう意識によるものというわけです。

これまで日本から数え切れないほどの恩恵を受けていながら、李明博の行動と発言は恩を仇で返すものだ——礼節の国であるわれわれ日本の国民の感覚からすればそういうことになりましたが、もともと韓国には「恩」という発想がないのです。

天皇陛下をはじめとする外国の元首どころか、そもそも自分の国の大統領や、目上の人、世話になった人に対しても、心から尊敬することはいっさいない。金もつけや保身のために利用するだけで、利用価値がなくなれば見向きもしないし、没落すれば大喜びでおとしめる。これが韓国人の病<sup>ケマヒ</sup>です。

韓国は北朝鮮よりはいくらかまし、とじつは私も李明博発言を聞くまでは思っていました。不明を恥じるばかりです。結局、北朝鮮が社会主義の衣をまとった李朝なら、韓国も自由主義の衣をまとった李朝でした。権力者も国民も、李氏朝鮮時代のままなのです。

みやわき じゅんこ

一九五二年、和歌山県生まれ。京都大学文学部卒業、大阪大学大学院博士課程修了。学術博士。著書に『真実の中国史』(BACON 946) (ヒジネス社)、『モンゴルの歴史』(刀水書房)、『世界史のなかの満洲帝国と日本』(ワック)などがある。